

1989（平成元）年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正に伴い誕生した「臨床看護総論」という科目名は、1996（平成8）年の指定規則改正以降しばらく消えていたが、20年を経て2009年に再び登場することとなった。今回の改訂によって、「臨床看護総論」は、基礎看護学の「看護学概論」「看護技術」とならずに、看護学の基盤となるものとして位置付けられている。

このような経緯をふまえ、本書をどのような構成にするか、かなりの時間をかけて議論をした。この科目は看護を学び始めてしばらくたった頃に開講されるであろう。その段階において、昨今問題になっている看護基礎教育と臨床現場の乖離を埋めるための教材として、あるいは看護専門職としてのプロフェッショナルリズムの涵養を目指す教材として、さらには世界に類を見ない超高齢社会を創造的な方法で牽引する役割を担うための教材として、臨床看護総論を通して学生に学んでほしいことは多岐にわたる。

本書の特徴は事例を中心においたことにある。「臨床」という言葉には、「現場」と「対象となる人々一人ひとり」という意味合いがある。したがって、それを学ぶことは事例に集約されると思った。また、健康のあらゆる段階において、人々が「患者」となって医療との接点をもつさまざまな場を想定し、そこでの看護活動、多職種役割、多職種間の協働と連携が、リアリティをもって生き活きと描かれるように工夫した。

さらに、事例の展開は、病気を自覚していない健康な段階から、急性期・回復期・慢性期・終末期と、一人の患者の経過を追うように構成した。このアイデアは、カナダのマクマスター大学の教育ツールにある。編者（任）は1997年に、PBL（Problem Based Learning：問題志向型学習）のための看護教育者育成プログラムに参加し、このような経過を追って作成されたシナリオを使って学習する体験をした。患者の視点に立って考えること、すなわち、目の前の状況だけではなくこれまでの経過とその後を十分イメージして「今、ここ」にかかわることを学ぶ仕掛けとして、たいへん有用であると感じた。加えて、働く場がさらに多様化する時代の看護職を育てることを意図した。この背景には急速に人口減と高齢化が進む社会において、訪問看護などかなりの需要が見込まれることや、病棟の機能分化が進み、回復期機能や慢性期機能を担う場で働く看護職が増えるであろうという予測がある。

事例からの学びを深めるために、また事例では取り上げられなかった点を補完するために、第1章と第3章では基本的事項をまとめた。事例では成人期・老年期を取り上げているが、本来はすべてのライフステージを対象とするものであり、これらについても第1章で解説している。

本書を通じて、看護を職業とすることのイメージを広げ、看護を学び実践する楽しさを学生に伝えることができると願っている。

任 和子
大西弘高